

RUBeC 演習を終えて

松 島 貫

Kan MATSUSHIMA

物質化学専攻修士課程 1年

1. はじめに

私は、2015年8月15日から31日までの期間で開講された龍谷大学の留学プログラムのひとつである RUBeC 演習に参加しました。アメリカ合衆国カリフォルニア州でホームステイし、同州のパークレー市にある Jodo Shinsyu Center にて英語でのテクニカルライティングと英語プレゼンテーションについての授業を受けました。加えて、現地の企業や龍谷大学の協定校へ訪問し説明を聞くことで、現地の企業や大学について知ることが出来ました。

2. 参加目的

私がこのプログラムに参加した目的は大きく分けてふたつあります。ひとつめは国際学会での発表を目標とした英文の作成技術と英語でのプレゼン技術についての学習を行うためです。ふたつめは海外で生活し海外の文化などに触れることによって自身の視野を広げ柔軟な思考を得ることができるのではないかと考えたからです。

3. 授業内容

3.1 テクニカルライティング

月・火・木・金曜日の午前中にはテクニカルライティングの授業がありました。この授業では事前に作成した自身の研究に関する英文要旨の校正をするために、英文における英文法や文の構成方法を学習しました。

毎回の授業のはじめに small talk というものが設けられ、週末に何をしたかであるとか、企業訪問をした次の日の授業の時には企業で何を学んだかなどを質問され、それらについて答えて先生とコミュニケーションを図り、会話をすることが求められまし

た。この時に英語での言い回しであったり、アメリカの文化やマナー等も知ることが出来ました。授業では、特に冠詞や接続詞について学びました。私は文章のはじめに登場する名詞には a または an を、二度目以降には the を使用すると考えていました。しかし、すでに唯一のものとして確立している場合などには文章中で初出であっても、the を使用するなど、教科書を読むだけではなかなか理解できないことを知ることが出来ました。英文要旨の校正はこのような冠詞の修正をはじめ、接続詞や文章構成など要旨全体に及びました。この構成はライティングを担当していた先生の助言を受けながらしたのですが、先生は工学を専門としていないため、自身の研究を説明しながら要旨の内容を正しい英文にする必要がありました。これは難しい作業でしたが、同行していた龍谷大学の教授が私たちの英会話の足りない部分を補ってくれたため、なんとか正確に伝えることが出来ました。

3.2 英語プレゼンテーション

テクニカルライティングを終えた後、午後にはプレゼンテーションに関する授業がありました。この授業の最終日には実際に英語のスライドを使った英語による発表が予定されており、それに向けて効果的なスライドの作り方や、発表する上での英語のワードストレスやチャンクについて学びました。効果的なスライドの作り方は Yahoo と Google のホームページが例に挙げられ、一枚のスライドに多くの情報を詰め込みすぎではなく、一目で言いたいことがわかるような、わかりやすいスライドを作るように指導されました。またワードストレス、チャンクの大切さを学びました。ワードストレスというのは、文章中の重要な語句を強調して発音することで、聴衆がすべての語句を聞き取れなかったとしても強調された語句が耳に入ることで全体的な内容が理解できるようにするための話し方です。チャンクは文章中の文節を区切って発音することで、聴衆が理解を早めることを目的としています。それらの他

にもジェスチャーや発表するときの姿勢なども指導されました。この授業を通して、プレゼン発表をする際には聴衆のことを意識しながら発表することも重要であるということに気づかされました。

4. 企業・協定校訪問

今回のプログラム中に、Keysight Technologies 社へ企業訪問をしました。Keysight Technologies 社はカリフォルニア州のサンタクララ市に本社を置く計測機器の業界最大手の企業です。この企業の特徴は計測機器の半導体部品からハウジングまですべてを自社で製造するといった徹底した品質管理と、自社製品の校正を自社製品で行うというすべてを自社製品でまかなっているという点でした。また会社の敷地はとても広く、敷地内には工場施設の他に食堂もあり、運動の出来る施設や社員が利用できる菜園などもあり、日本では見られないような光景でとても新鮮で刺激的でした。仕事の面と仕事外の面が同じ敷地内で両立しているところにとっても驚かされ、仕事もしやすそうだと感じました。

龍谷大学の協定校であるカリフォルニア大学デービス校（UCD）を訪問し、UCD で教授をしている先生方の説明を聞くことで、海外の大学で学んでいる学生の研究活動や生活環境について知ることが出来ました。私が今回の訪問で最も驚いたことはUCD の持つ敷地面積の広さでした。全体で21 km²にも及ぶ敷地面積を持ち、学生のほとんどが自転車を利用してキャンパス内を移動しています。また自転車の利用率が高いことから学内の道路には自転車が走りやすいようにロータリーが設置されていたり整備がキチンとされていました。さらに学内には、書店、学生寮、スポーツジム、さらにボーリング場などもあるようで、勉学や研究以外の部分についても充実して刺激を受けられるような設備が整ってい

ることなどから、身体的にも精神的にも窮屈でなくのびのびと学生生活を送れるように整備されていることに感心しました。

5. ホームステイ

ホームステイ先での生活では、当然のことながらホストファミリーは英語しか喋れず、意思疎通をはかることに非常に苦労しました。だが一週間を過ぎるころには次第に耳が慣れてきて初日より英語を聞き取ることが出来るようになっていました。しかし圧倒的に私の語彙力が足りないため、わからない単語や言い回しが出てくるたびに、会話を中断してその意味について聞いたり説明してもらわなければならない、自身の力不足を大いに感じました。だが自分の英語が通じて同じ話題でホストファミリーと盛り上がる事が出来たときには非常に達成感を得られたし、よりスムーズに英語が喋れるようになりたいと思いました。海外の文化や考え方に触れて今まで知らなかった新しいことを知るとともに、日本と同じような考え方をする部分なども知ることができて非常に刺激的でした。また機会があるのならばぜひ海外へ行きたいと思いました。

6. おわりに

この2週間の演習を通じて、海外への抵抗がとても減りました。私は演習に参加する前までは、この先就職をして、どこかの企業に所属して海外赴任することなどはどうしても避けたいと思っていました。しかし今ではいずれ日本に帰ってこれるならば、海外で生活するのも良いのではないかと思えるようになりました。そのためにこれからも英語が話せるように関心をもって生活していきたいと思いません。